
ぬかるみ

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬかるみ

【著者名】

ZZマーク

Z5507A

並盛りライス

【あらすじ】

救いようがない話は、救いようがないコトが救い（－－）そんな男の話。

昼間は多少暖かくなつたとはいっても朝はまだ幾分涼しく、上着をはおらなければ縮み上がつてしまつ。

空気が澄んでいて、縦に割れるような小鳥の鳴き声が聞こえる。

少し伸びをして、固まつた筋肉をほぐす。

力仕事は疲れが溜り安く、ストレッヂを怠れば腰痛や筋肉痛に悩まされることは経験から分かつてゐる。

仕事道具を一式積めた鞄を肩にかけた。

扉を開けていつものように出かけようとした。

足元には黒く泥が沈殿したぬかるみが広がつていた。
躊躇いがちに一步下がる。

昨日新調したばかりの新しい白いスニーカーを汚すのは気が引けた。

とはいつても、家には裏口などはなく玄関から出る以外にでかける術はない。

覚悟を決めて一步を踏み出す、しかしぬかるみは思つたよりも深い。

足首がズブズブと沈みはじめて、膝から腿までいとも簡単に飲み込んでしまつ。

さうにたちが悪いことに、突つ込んだ右足を引っ張り抜こうと踏ん張

つた左足もぬかるみに沈み始めている。

ぬかるみは、ひんやりと冷たい。靴どじろかズボンも泥だらけになつた。

冷静にならうとするほど焦つてしまい、もがけばもがくほど深く沈む。

家の前の道は舗装されておりず、したがつて水溜まりぐらくならできても不思議ではない。

しかし、このぬかるみはやうに「レベルのものではなかつた。

人を一人飲み込んでしまった位に深い、沼といつていい。

扉を開けた時には気付かなかつたが、深さだけでなく大きさも相当異常なものだ。

家の前から、舗装されたコンクリートの道までの3メートルぐらうが一晩でぬかるみと化していたのだ。

ようやく両足が膝まで浸つた辺りで、それ以上沈まなくなる。

身動きは捕れず、足を進めようとすれば鉛を纏つたように重い。

とつあえず前には進めそつなの、時間がかかるだらう。

それ以上、両足が沈まないと分かると少しほつとした。

状況は決して良い訳ではないが、これ以上悪くはならないと分かる

と人は安心する。

足元からは冷ややかな冷氣が伝わってく。

このぬかるみから抜け出すには、あの舗装された道路まで頑張つてたどり着くしかなさそうだ。

それに、もう時間もなかつた。

どんな理由があるにしても、遅刻なんてしきものなら親方に酷い目にあわされる。

動かない右足を、力一杯前に進める。頬りないながらも10センチぐらい前に進める。

同じよつと左足も前に進めたとき、あることに気付いた。

右足がさつきよりも深く沈んでいるではないか。

そして、左足も…。

なんとぬかるみは、前に行くほど深さを増してくるようだ。

それならば、足が沈んでしまわぬ内にできるだけ前に進んでしまおう。

必死になつて、初めて歩き始めた子供みたいに右足と左足を交互に前にだす。

その間にも、腿は完全に沈み、とうとう半分までた辺りで腰まで

ぬかるみにハマってしまった。

どれだけ右足を前に出そうとしても、空中に浮いた自転車のようなくずくだけだった。

そして、今まで前に進んでいたから沈むスピードも遅かった。

体が止まつてからは、もう下にしか体は沈まないものである。

腰までだつたぬかるみは、腹を飲み込んだ。

じこじこして、本当に身動きがとれなくなつた。

道路まではまだ1メートル前後の間隔が空いている。
救いようのないこの状況で確なことは、遅刻は免れないということ
だつた。

今となつては遅刻よりも、じこから抜け出したいという想いだけだ
つた。

いつたいオレが何をしたというのだろうか、真面目に汗を流して働
いて節操のある暮らしてきたオレが、どんな罰を受けることがある
うか。

怒りは嘆きに変わり、ぬかるみの冷たさが心地好く思える。

突然、頭の方から誰かの声がした。

初めは神か悪魔の声かと思ったが、よくよく聞いてみると知つてる
声だった。

この時ばかりは、村一番の悪戯好きの少年すら神の使いに思えた。

「お~い。カインー！」

カインに向かつて大きな声で叫ぶ。

「なんだい、そんな所で何を遊んでるのさ。親方がカンカンだよ。

」

ある程度、予想していたがこの状況を見ればいくら親方でも許してくれるだろう。

「出られないんだ。助けてくれよ。」

こっちに向かつて来たカインに言ひ。

「分かった。助けてやるから、財布から10ドル投げて寄越してくれよ。」

状況をまるで楽しむようなカインに少し腹が立つたが、ある程度予想していたので10ドル投げてやる。

「ありがとよ、でもオイラの力じゃどうにもならない。仲間を呼んでやるから財布を投げてくれよ、一人10ドルで手伝わせるよ。」

助けてやるといつて、どうにもならないなんて…

仕方なく、財布をコンクリートの道に投げた。

カインはそれを拾つと、仲間を呼びに行つた。

しかし、待てど暮らせどカインは戻つてこず。もちろん助けもこなかつた。

昼になると、すきつかり太陽が登り、身体中の泥が乾いてきた。

腹まで泥の中に埋まつたまま日光はサンサンと体力を奪つた。

水などはもうろんないまま、ついには干からびて意識も無くなりそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5507a/>

ぬかるみ

2010年10月10日23時29分発行